
出版教育研究所通信

No. 4 (2002. 12. 3)

出版学校 日本エディタースクール 出版教育研究所

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-4-6

電話 03-3263-5892 Fax 03-3263-5893

<http://www.editor.co.jp/> E-mail: ipe@editor.co.jp

目 次

日本ペンクラブ ‘電子文藝館’ への招待	中川五郎.....	1
編集技術 校正作業にパソコンを利用する	小林敏.....	7
文献 最近出た出版関連図書・雑誌から		5
消息 “出版教育研究所所報” 第8号の刊行ほか.....		6

日本ペンクラブ ‘電子文藝館’ への招待

<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/>

中川五郎

誕生して満1年

電子文藝館の構想は、数年前から秦恒平理事を中心に、日本ペンクラブ内の電子メディア研究会で検討されてきた。そして、ちょうど1年前、2001年11月26日に、‘電子文藝館’は生まれた。日本ペンクラブは1935年11月26日に創立されたので、その日（ペンの日）に因んだわけである。まず、簡明な筆者紹介をつけて物故会員と現会員の作品の紹介から始めた。ちなみに、初代会長の島崎藤村から13代目の梅原猛会長までの代表的作品が一つずつ、歴代13会長全員がある。次には、‘招待席’を設け、原則として1935年以前に亡くなった方々の作品を選んで収めた。その結果、開館満1年の現在は、1816年生まれの河竹黙阿弥から、1959年生まれの山田岳氏まで215人の作品が集まっている。上記のURLにアクセスして、



‘日本ペンクラブ電子文藝館’を呼び出せば、本館（総目次）、招待席、詩、歌・句、戯曲、ノン（ノンフィクション）、評論、随筆、小説、児童、広場、翻訳と見出しが並ぶ。明治・大正・昭和・平成と、150年にわたる、日本近現代文藝史体系の基礎が作られた。すべて本人または著作権者のご諒解を得て、もちろん無料公開である。

その中から、異色の人や異色の作品を少し紹介したい。

芥川賞を辞退した唯一人の作家・高木卓（1907～1974、物故会員、小説）

芥川賞は昭和10年に菊池寛によって創設された。芥川賞辞退は昭和15年上半期の第11回芥川賞決定の時に起こった。受賞作は高木卓の小説‘歌と門の楯’で、歌人大伴家持が主人公、勃興してきた藤原氏に対して、大伴一族の武（楯）より歌を選んでいった経過を小説にしたものである。辞退理由については“歌と門の楯”高木卓著、昭和15年9月三笠書房刊の‘あとがき’に本人がたんとと述べていて、電子文藝館にも収められている。この本は美しいままで国会図書館にあり、昭和11年上半期の芥川賞候補となった‘遣唐船’などの他の作品も読むことができる。

ただ、菊池寛は怒った。‘ひとがやろうというのに受け取らぬとはけしからぬ’、‘高木君は芥川賞に決ったのだから、辞退しようとしまいと、もうそれだけで有名になった。ところが文藝春秋社は、ことわられて恥をかかされた。ひとに迷惑をかけておいて、自分だけ有名になるとは何事か’と、当時の“文藝春秋”の‘話の屑

籠’の欄に書いたという。

この事件は“回想の芥川・直木賞”永井龍男著，昭和54年文藝春秋刊にあるが，著者は創設以来，二つの賞の実務の当事者だっただけに詳しい。また，“文壇事件史”読売新聞文化部編，昭和43年読売新聞社刊も，元気だった高木卓に直接インタビューしているので参考になる。今年の“文藝春秋”2月号，創刊80周年記念号でも，芥川賞・直木賞意外史として扱っている。

高木卓は，本名安藤熙，母は幸田露伴の妹で日本最初のバイオリニスト安藤幸。昭和15年は33歳の頃で，旧制水戸高校のドイツ語講師，のち旧制一高から東大教養学部教授となる。芥川賞辞退以後は，児童向きの古典文学や古典音楽の解説書なども多い。

‘喫煙40年’を書いた愛煙家・寺田寅彦（1878～1935，招待席）

禁煙論が全盛の今，愛煙家だけに読んで頂きたい随筆である。岩波文庫の“寺田寅彦随筆集”全5巻には入っていないので，あまり知られていない随筆である。冒頭に‘はじめて煙草を吸ったのは十五六歳ごろの中学時代であった’とあるので，編者・小宮豊隆が教育上の観点から採用しなかったのだろう。

そこには，時代は明治から昭和にかけ，場所は高知・東京・ベルリン・パリにわたり，興味深い喫煙の話が一杯ある。誰も‘煙草が健康に悪い’とか‘嫌煙権’とか言わなかった古き良き（？）時代に，愛煙家にして，日本屈指の随筆家である寺田寅彦が書いたエッセイである。他で読むには，絶版になっている“寺田寅彦全集”を探すしかない。なお，彼は亡くなる三日程前まで，看護婦さんに手真似で煙草をもらって吸い続けたとのことである。

20世紀前半の最高の出版人・岩波茂雄（1881～1946，招待席）

岩波茂雄に著書は一冊もない。“出版人の遺文・岩波茂雄”昭和43年栗田書店発行の‘あとがき’には‘生前に著書はないが，沢山の文章を書きのこしている’とあるが，私信や講演などの草稿を除き，全部自分で書き，署名をし，公に発表した文章はそれほど沢山ではない。

三木清との合作とも言われるが，今も岩波文庫の巻末にある‘読書子に寄す’は格調高く出版の理想を謳い上げた名文である。また私信‘小生は一冊の雑誌一冊の図書を出版するにも未だ曾て學術の爲め，社會の爲めを思わざる事なく...’は岩波の理想であり，信念でもあった。

‘回顧三十年’は昭和21年3月～5月に日本読書新聞に連載された口述筆記で、岩波の死により、残念ながら5回で打ち切られたが戦争末期にまで触れているので、自らが語った自伝ともいえる。

少し問題なのは、昭和13年10月の‘岩波新書を刊行するに際して’である。これは‘読書子に寄す’よりも熱の入った文章である。しかし、“出版人の遺文”にも省かれているし、この‘電子文藝館’にも入っていない。一部を引用すれば‘... 現下政党は健全なりや、官僚は独善の傾きなきか、財界は奉公の精神に欠くところなきか、また頼みとする武人に高邁なる卓見と一糸乱れざる統制ありや、...’とある。武人以下の句が軍国主義下の日本で大問題となり、ただでは置かぬと威かされ、さすがの岩波も‘この時は実のところ怖ろしかった’と‘回顧三十年’に書いている。そのせいか昭和15年の秋に発行された岩波新書からはこの文章は消えてしまった。戦後は逆に、この文章にある‘東亜民族の指導者’や‘皇国の発展に資する心こそ大和魂の本質’などの文章が毛嫌いされ、陽の目を見なくなってしまった。また、1949年に青版で再出発した岩波新書には‘岩波新書の再出発に際して’という別の文章に置き換えられたこともあるが、昭和13年の時代背景を知る人達は、非常に勇気のある熱のこもった文章に驚くに違いない。

30歳から50歳まで出版社を経営した長谷川巳之吉(1893～1973,物故会員,随筆)

大正12年に出版社‘第一書房’を創業し、昭和19年に‘これで余生は一介の老書生として美術の勉学に努め候間旧来の御交誼希上候’の挨拶を送って廃業した。その21年間に8つの全集で135点、単行本で859点、あわせて994点の書物を出版。他に‘セルパン’を始め、13種の雑誌計276冊を出版した。その間の経過については“第一書房長谷川巳之吉”(日本エディタースクール出版部)が詳しい。その中から、彼の遺文‘第一書房設立の趣意’、‘新人発掘の歓び’、‘或る日の“自由日記”’が“理想の出版”と題して収められている。

20世紀後半の最高の出版人・花森安治(1911～1978,招待席に予定)

花森の偉大さについては、今更触れることはない。300号に達した“暮しの手帖”のどの号を見ても、それは伝わってくる。岩波より30年遅れて生まれた花森には、3冊の著書がある。昭和20年代の“服飾の読本”と“暮しの眼鏡”はさておいて、“一棧五厘の旗”はすごい。昭和46年10月の初刷から平成14年10月の第9刷まで、30年にわたり発行され続けている。写真はグラビア、文字は活字で

通して来たこの本も、さすがにオフセット印刷に切り替えざるをえなくなったが綺麗な印刷である。

花森の理想は一言で言い難いが、戦争を誰よりも憎み、庶民の暮しを誰よりも大切に考えたことにあり、国家を全く信用しなかったこともある。“一棧五厘の旗”が出版された昭和 46 年以降、昭和 53 年彼が他界するまでの 7 年間の“暮しの手帖”から、じっくり選んで近いうちに電子文藝館に収めたい。

ここに紹介したのは、215 人中の 4 人と予定の 1 人に過ぎないが、上記の URL にアクセスして頂きたい。大正時代以前に生まれた 122 人の内、私は名前すら知らない人が 20 数人もいるので、まずこの人たちから読んでみたいと思っている。いわば、明治以後の文藝の宝庫から、居ながらにして読めるわけで、ぜひ利用して欲しい。なお、今後、私は出版人や編集者が残した文章を探していこうと思っている。原則として、ペンクラブの会員か物故会員の中で紹介したい文章があれば、推薦して頂ければ幸甚である。(故人は敬称略)

編集部注 中川五郎氏(ながわごろう, 本校講師)は、日本ペンクラブ電子メディア委員会委員として‘電子文藝館’の運営に携わっておられます。

文献 最近出た出版関連図書・雑誌から

- ・塩澤実信著“定本ベストセラー昭和史”展望社, 7 月
- ・藤本信彦著“観察ノート出版業界西と東 アメリカ出版研究シリーズ 4”アメリカ出版研究会, 販売: 出版研究センター, 7 月
- ・「本とコンピュータ」編集室編“季刊・本とコンピュータ 2002 年秋号(第 2 期 5 号)”大日本印刷 ICC 本部, 発売: トランスアート市谷分室, 9 月
- ・臼井史朗著“疾風時代の編集者日記 ふたたび「弟子三尺」”淡交社, 9 月
- ・佐藤卓己著“『キング』の時代 国民大衆雑誌の公共性”岩波書店, 9 月
- ・植田康夫監修“出版 2004 年版”(最新データで読む産業と会社研究シリーズ), 産学社, 9 月
- ・石井恭二著“花には香り本には毒を サド裁判・埴谷雄高・澁澤龍彦・道元を語る”現代思潮新社, 9 月
- ・大村彦次郎著“ある文藝編集者の一生”筑摩書房, 9 月
- ・松木寛著“蔦谷重三郎 江戸芸術の演出者”講談社(講談社学術文庫), 9 月

- ・野村保恵著“校正ハンドブック 新版”ダヴィッド社，10月
- ・長友千代治著“江戸時代の図書流通”(仏教大学鷹陵文化叢書7)，仏教大学通信教育部，発売：思文閣出版，10月
- ・山名一郎，印刷出版文化研究会著“図解印刷業界ハンドブック”東洋経済新報社，10月
- ・大月隆寛編“田口ランディその「盗作＝万引き」の研究”，鹿砦社，11月
- ・橋本健午著“有害図書と青少年問題 大人のオモチャだった“青少年””明石書店，11月

消息 “出版教育研究所所報”第8号の刊行ほか

*1997年に第7号を出して以来中断していた“出版教育研究所所報”の第8号が11月に出版された。第8号は‘特集 日本の教育’で、文嬾珠‘日本における出版教育の現況と出版教育の有効性について 出版関連講座のエducatorに対する調査を中心に’が掲載されています。本論文はタイトルが示すようにわが国の大学に対して上智大学大学院博士課程在学の韓国人留学生がおこなった本邦初の調査報告です。本研究所のホームページにすでにその一部が発表されていますが、本号には全文が収録されており、大学の出版教育の実態を知るうえでの貴重な文献となっています。(B5判78頁・日本エディタースクール出版部・800円+税)

*元日本出版学会会長で、“出版学序説”(日本エディタースクール出版部)などの著者である箕輪成男氏は、出版学研究の推進と中日両国編集出版学研究者の友好に対し卓越した貢献を行ったとして、10月中国昆明で開催された中国編輯学会創立10周年祝賀大会において、‘編集出版学国際交流奨’を授賞された。また韓国からは韓国出版学会会長の尹炯斗氏が同賞を授賞された。

ちなみに同じく元日本出版学会会長で、“出版学と出版の自由”(日本エディタースクール出版部)などの著者である清水英夫氏は昨年10月ソウルにおいて開催された第10回国際出版学術会議において、韓国出版学会が制定した‘南涯安春根出版著述賞’の第1回受賞者として同賞を授賞された。同賞は、韓国の著名な出版学者で韓国出版学会の創立者であった安春根氏(1927-1993)の志と業績を称えるために、出版学と関連した研究・著述分野で大きな功績をなした国内外の人士を対象としている。

【編集技術】

校正作業にパソコンを利用する

小林 敏

はじめに

2002年5月に関口安義著“恒藤恭とその時代”が日本エディタースクール出版部から刊行された。著者からの希望もあり、久しぶりに校正作業（素読み）を担当した。

最近では原稿を書くにも、また、原稿を整理する作業においてもパソコンを利用するケースが多くなり、せっかくの機会でもあり、校正作業でもパソコンが使えないかを考えてみた。乏しい経験であるが、校正作業にパソコンを利用した1つの報告として簡単にまとめてみた。

1. 辞書を利用する

辞書を利用するのは、校正だけでなく原稿の作成・整理でも同様である。今回の作業では主に“国語辞書”“英語辞書”“百科事典”および“年表”を用いた。このうち、“国語辞書”“英語辞書”は印刷媒体と電子媒体の両方があり、“百科事典”は電子媒体のみ、“年表”は電子媒体の“百科事典”に付属しているものはあるが、“年表”そのものの電子媒体はもっていなかった。これが作業を行う際の環境であった。

“年表”は、いい電子媒体をもっていなかったこともあるが、もっぱら印刷媒体のものを利用した。“百科事典”に付属している年表も利用してみたが、調査項目にもよるであろうが、検索のしやすさからは印刷媒体のほうが便利のように思えた。校正した本が評伝であり、ある程度時間の経過にそって書かれていたことも理由になるかもしれない。

“国語辞書”と“英語辞書”は、頻繁に利用することを前提に、あらかじめ起動して使用した。使用した感じでは、パソコンの画面で、調査項目を入力しなければならないという点では時間がかかる（コピーして貼り付けることもできる）が、ただちに検索できるという点を考えれば、印刷媒体よりは電子媒体のほうがやや検索

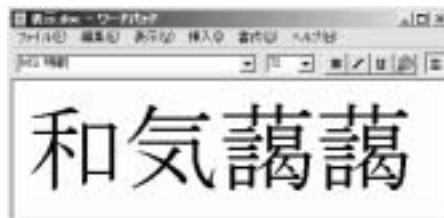


は早いように思われた。

今回利用した“国語辞書”は“スーパー・ニッポニカ[ライト版]日本大百科全書+国語大辞典”(小学館)である。この辞書を使用した“わきあいあい”の検索結果を上に掲げておく。画面表示の文字サイズは18ポイントに設定してある。

校正では、特に漢字の1点1画を問題にする。そのために調べた用語の表示は、できるだけ大きいほうがよい。私の場合は近眼が強いので辞書の細部を見る場合は、眼鏡をはずして辞書を極端に目に近づける方法をとっている。

この漢字を大きく表示する点では、パソコンはとても便利である。今回の作業では、動きが早く、また文字の大きさが指定できるソフトとして“Word Pad”を使った。ここで、たとえば72ポイントなどと文字サイズを設定しておき、検索した辞書の用語をコピーして貼り付けた(ペースト)。もちろん、すべての漢字をそうしたわけではなく、字画の多い、問題となりそうな漢字を主に行った。この漢字を大きくして表示できる点は、とても便利であり、あらためて漢字の1点1画をきちんと再確認しながらの作業が、ある程度確実にできたのではないかなと、ひそかに

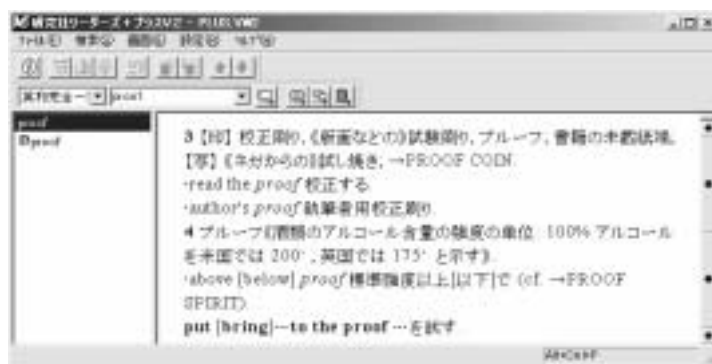


思っている．“ Word Pad ” で文字を 72 ポイントと大きく表示した例を前ページに掲げておく．

“ 英語辞書 ” は松田徳一郎監修 “ CD-ROM 版リーダーズ+ プラス V2 ” (研究社) を利用した．印刷物の辞書としても “ リーダーズ英和辞典 ” をもっているが，電子版は，“ リーダーズ・プラス ” も入っており，46 万語が収録されている（その後 “ 英辞郎 ” (100 万語収録) も入手し，最近はこの 2 つを利用している）．

“ リーダーズ英和辞典 ” は，今回の校正作業ではもっぱら電子版を利用したが，日常の使い方では，パソコンが起動している場合は電子版，起動していない場合は印刷版というのが，だいたいのパターンになっている．

次に “ CD-ROM 版リーダーズ+ プラス V2 ” の検索画面を掲げておく．文字サイズは 16 ポイントに設定してある．



2. テキストを検索する

今回の作業で辞書の利用以上に役立ったのがエディタの検索機能である．私は原稿の執筆，整理などテキストに関係した仕事の多くは “ WZ ” というエディタを利用している．メーラー（電子メールのためのソフト）も “ WZ ” に付属している “ WZ MAIL ” を使っている．ワープロやエディタは手になじんだものがよいという点では “ WZ ” が最も手になじんでいる．“ 秀丸エディタ ” の方が操作性や安定性では優れているという意見もある．一時はもっぱら “ 秀丸エディタ ” を使っていたが，数年前からはほとんど “ 秀丸エディタ ” は使わなくなってしまった．

今回の “ 恒藤恭とその時代 ” では，幸いなことに著者から全文のテキストが入手できた．入手したテキストに若干の訂正を加えて印刷所に入稿したので，校正刷と入手したテキストとが完全に一致していたわけではないが，実務的にはそれほど支

障はでなかった．このテキストの使い方は後述する．

校正，特に素読みでは表記その他での不統一や矛盾がないかの確認が大切である．問題となりそうな事項は校正刷に鉛筆等でチェックしておき，先に読み進んだときに確認できるようにしておく．しかし，これも先に進んでから問題を見つけ，確か前にあったのだが，どこであったか，…，というケースも多い．また，ページは分かっているが，その中のどこであるか探すのに時間がかかる場合がある．

この確認にエディタの“WZ”と入手したテキストを利用した．つまり，ある言葉なり，事実があった場合に，それに関連した事項が，校正刷の先の方に，あるいは後の方になかったかを“WZ”の検索機能と入手したテキストを利用した．入手したテキストはワープロ固有の形式で，複数のファイルとして保存されていた．これをテキスト形式に変換し，さらに1つのファイルにまとめてしまった．これで本文については先頭から末尾までが検索できるようになる．

“WZ”の場合は，該当項目をいちいち入力しなくてもマウスでドラッグして選択するだけで，後は前方または後方かのボタンを押すだけで，検索そのものの操作が軽快なので，素読みをしながらテキストを検索してもそれほど作業の負担にはならない．それよりは，自分の探したい事項がほぼ間違いなく（あくまでほぼです），時間を掛けずに探すことができるという点でストレスを少なく出来たのではと思っている（検索する用語の間に改行コードが入っている場合など検索できない場合もあり，コンピュータでの検索を100%信用することは危険であることはいうまでもない）．また，正規表現を利用すれば，かなり複雑な検索もできる．

ただ，テキスト形式なので，実際の校正刷の行またはページとは体裁が異なる．この点は，検索した箇所の前後の見出しを調べ，目次で確認することで，校正刷のどの部分であるかがほぼ分かった．

特に効果を発揮したのは年譜の校正である．年譜を素読みしながら，その中での関連事項を本文で検索するとほぼ該当する本文箇所が見つかる．これにより年譜と本文との整合性の確認を比較的スムーズに行うことができたと思っている．著者からも大変丁寧に読んでいただいたと感謝されたが，はたして，これは私の力なのか，それともパソコンに助けられたのか，どちらかわからないというのが正直なところである．
(こばやしとし，本校出版教育研究所)

後記 “出版教育研究所通信”第4号をお届けいたします．皆様方からの投稿やご意見をお待ちしております．(小林敏)